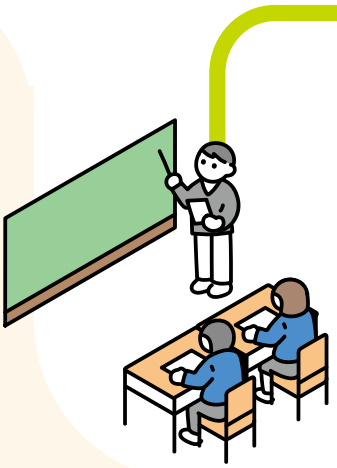
4校の事例をピックアップ！



今、注目のキャリア教育・支援

変化し続ける社会の中で、一人ひとりに合った活躍の場を見つけるための大学の取り組みを紹介します。

文＝綱川晶子（埼玉大学、筑波大学）、岸並徹（金沢工業大学）、船木麻里（東京工芸大学）　写真＝和仁貢介（写真映像部／埼玉大学）、東川哲也（写真映像部／金沢工業大学）、学校提供（埼玉大学、金沢工業大学、東京工芸大学）

埼玉大学

GYプログラム

地球共通の課題と向き合い社会に貢献できる「グローバル市民」へ

埼玉大学の協定校である海外大学へ留学に行く学生に向けたGYプログラム生専用の授業の様子。グループワークやプレゼンテーションなど学生主体の授業を行い、留学先での授業に備える。

GYプログラム担当教員
山田 真弓

副学長（国際・グローバル教育担当）
市橋 秀夫

現在120校以上と留学協定を結んでいる埼玉大学。留学と国内外でのグローバルインターンシップの経験を通じて、地球共通の課題解決のために行動できる「グローバル市民」を育成すべく、全学部生を対象に展開しているのが「GY（Global Youth）プログラム」だ。

このプログラムには、SDGsをベースに格差や環境問題などといった課題について学び、議論する事前講義が設けられている。担当教員の山田真弓先生はこう語る。

「海外に行けば、あらゆる国の人と政治や文化などについて意見交換をすることになるでしょう。私たちにとっても身近であるはずの地球共通の目標、SDGsについて、学び、考えを深め、議論によって視野を広げてほしいのです」

所属する学部の専門性のある学びに加え、語学力やSDGsなどGYプログラム独自の科目を選択し、分野横断的な幅広い国際的知見の習得を目指す。そのうえで、主に2年次の後期から2学期間（1年程度）にわたって留学。その後、国際協力にかかわる団体や企業などでインターンシップを実施する。留学で身につけた英語の表現力やコミュニケーション能力を生かせる環境に身を置くのだ。

課題解決の現場で留学での学びを活かす

大学の国際担当であり副学長の市橋秀夫さんは、プログラムの目的をこう説明する。

「インターンシップでは、留学時に求められていた英語力だけでなく、自発的に考え、行動する力が生きます。インターンシップ先は主に開発途上国。現地の環境にもまれ、社会課題に必死に取り組むことで、自分がやるべきことを考え、実行する力がつくと考えています」

プログラムには、埼玉県下

NPO団体「道普請人」のインターンシップでは、ウガンダで道路整備を行う。

JICAエジプト事務所のインターンシップでは、日本式教育を導入するプロジェクトを行う。

でSDGsに取り組む団体によるセミナーも取り入れられている。

「〝グローバル課題〟は、海外にだけあるのではありません。外国人との共生やシングルマザーの貧困など、当然ですが埼玉にも世界共通の課題があります。どこで暮らしていても、どこで働いていても、グローバルな視点は必要なのです」(市橋さん)

自分が目指すキャリアが明確

修了生の就職先はさまざまだが、プログラムでの経験を買われ、採用後すぐに海外に赴くケースも少なくない。

「単に海外で学んだだけではなく、課題解決の現場を知っていること、自分の体験を言語化できることが強みになるのでしょう。なりたい自分、目指すキャリアが明確なため、企業とのマッチングがスムーズなようです」(市橋さん)

GYプログラムは交換留学制度により、休学・留年せずに留学したい学生のニーズにも応える。さらに最近は円安の影響で、留学やインターンシップへの参加を躊躇する学生も少なくないそうだ。期間を短縮する、保護者向けの説明会を開催するなどして、学生とその家族の意向や事情に寄り添うことで、プログラムの裾野を広げたいという。

参加者の声

教養学部4年
佐藤 稜太さん(左)
教養学部4年
鈴木 南結さん(中央)
教養学部4年
前田 紗希さん(右)

佐藤さん:もともと、環境保全について興味があり、アメリカ留学後のインターンシップでは、インドでエコツーリズムの可能性を探る研修に参加しました。2つの異なる環境で学べたことは大変有益な経験です。

鈴木さん:人道支援の最前線を体験したく、ベトナムで生活困窮者に食糧支援をするインターンシップに参加しました。生命維持に不可欠な食や水の課題を肌で感じ、自分のキャリアを考えるきっかけになりました。

前田さん:GYプログラムの学びで見えたのは、日本の現状と課題です。人口が減少しても持続できる町づくりを目標に、ビジネスで地方創生に取り組みたいと考え、地方の中小企業を支援する保険会社に内定をいただきました。